



あしよし
「蘆葦春秋曲」
(90cm×1000cm)
琵琶湖の四季と
環境の循環を描いたものだ

「滋賀編」

琵琶湖から祖国へ、 循環思想を伝えたい

馬樹茂 書画家

琵琶湖との出会いは、来日直後の二十年以上前。仏画を学んでいた私に、知人たちは「観音の里を案内しよう」と言って、琵琶湖をぐるり、湖北の方まで案内してくれた。自然のなかに佇む寺や仏像。中国の敦煌に似た風景に胸を打たれた。

特に近江八景には懐かしさを覚えた。中国で古くから理想郷として描かれている「瀟湘八景」にちなんだものということもある。ただそれよりも、美しい自然を前にしたとき人の心に生まれる感動は、国境を超えて通じるのだと実感した。

琵琶湖との二度目の出会いは十年前。ある画家の比叡山麓のアトリエに招待されたとき。そこからは、琵琶湖がまるで庭のように見渡せる。自分もこういう環境で絵を描きたい。その思いが強まった。

芸術と自然環境は切り離せない。十九世紀、バルビゾン派や印象派の画家たちは街を出て、田舎で創作に打ち込んだ。日本の紫式部も千年前、琵琶湖畔の石山寺から月を眺め、源氏物語のインスピレーションを得たのかもしれない。私もまた昼となく夜となく琵琶湖を巡り、風の音や月の光を感じることに創作の源泉だ。

滋賀に居を定め、改めて気づいたのは、この地に根づく循環思想だ。ヨシ（葦）はその象徴かもしれない。鳥や魚の産卵の場所となり、枯れば燃やされて畑の肥料となる。そのヨシで紙をつくったところ、墨との相性もよい。その紙に私は何枚も何枚も琵琶湖の絵を描いた。芸術を通して環境への関心を高めたいと「湖都百景芸術大賞展」を発案したのも、この地に暮らしたからこそ。自然の循環をテーマに全国から作品を募り、〇八年には北京でも展示を行った。

祖国中国は今、欧米をモデルに急速に経済成長を遂げているが、環境への配慮を忘れてはならない。敦煌の近くにある「月牙泉」は三日月型の美しい湖。しかし地下水の汲み上げにより、年々その湖面が小さくなっているのは悲しいことだ。

自然の循環を尊重している場所には、素晴らしい風景が存在する。それは大切な自然遺産、文化遺産であり、失われてはならないものだ。絵描きは微力かもしれないが、アートで人の心に訴えるのが使命。今こそ日本の循環思想・琵琶湖の循環モデルに学んでほしい——ここ琵琶湖から、祖国、そして世界に向けて伝えたい。

躍



Ma Shumao マ・シューマオ 書画家
1955年中国北京生まれ。天津美術大学卒。
89年京都市立芸術大学修士課程入学、上村淳之に師事。92年国際日本文化研究センター
研究員となり日中比較文化を研究。優れた美術
作品を通じて琵琶湖の環境保全を考える「湖都
百景芸術大賞展」を発案、06年より毎年開催。
白馬国際藝術会主宰。西安培華学院教授・芸
術設計学院副院長。画号は茂山人。
<http://hakubakai.org/>
<http://plaza.rakuten.co.jp/mosanjin/>

